

第7回 理研バイオリソースセンター リソース検討委員会 諮問事項について
微生物材料開発室

日 時 平成23年1月7日(金)13:58～16:04

場 所 新東京ビル 7階 739・740区 理化学研究所 東京事務所 大会議室

出席者

(委員等)渡邊信 委員長、亀井克彦 篠田純男 鈴木健一朗 炭田精造 各委員

(NBRP)佐藤事務局長、平田事務局員

(理研側)阿部BRC副センター長、森脇特別顧問、大熊微生物材料開発室長、加部研究推進部長、村上課長 他

1. 各室・チームは科学的に大きな意義のある業績及び社会的に波及効果の大きな業績を挙げているか。

総評：現在の体制で最大限に機能を発揮し、十分な成果を挙げている。

1) 科学的に大きな意義のある業績として

- ・ 世界的に見て ATCC、DSM と並ぶ 3 大保存機関として実績を挙げているのは評価できる。ただし、現スタッフではキャパシティとして限界であるので、少なくとも現在の学術研究用のリソースに特化していくべきであろう。
- ・ 微生物材料に対し、分類学的基準株を中心に学術目的の利用において世界の中核機関としての役割を十分に果たしている。
- ・ 地味ではあるが、当室では微生物の分類、リンパ組織内共生細菌群の発見等、質の高い研究成果を発信している。
- ・ 当室より提供された微生物株を用いて得られた論文も 4 年間で 800 を越える数になっており、微生物学分野発展への貢献は大きい。

2) 社会的に波及効果の大きな業績

- ・ ATCC、DSM とならんで JCM が世界の 3 大拠点の一つとして成果を挙げていることを十分に広報することにより、政府筋や社会一般に広く PR すべきである。広報の際に、ATCC や DSM と JCM を比較して示し、JCM の持続可能な体制の在り方について課題があることを示すべきと思われる。

2. 各室・チームの運営にかかわる Plan-Do-Check-Action (PDCA) サイクルは機能しているか。

A. 前回の BRAC、リソース検討委員会及びセンター内自己点検・評価の指摘事項への対応状況について。

総評：各指摘事項について、素晴らしい努力をされており十分に機能している。

- ・ リソースの受け入れ態勢と処理能力はトップクラスと言える。一方、生物多様性条約対応等、今後

のコミュニティの求めているリソースや付加情報にも注視して欲しい。

- ・ 難培養微生物の保存は、他機関(諸外国を含む)に対する差別化の点でも特に重要で、優れた方策と考えられる。
- ・ 筑波研究所への移転は、一大プロジェクトになると思われ、選択と集中の方向性を検討する期間として欲しい。貴重な株に損傷の生じないよう、慎重にお願いしたい。また、環境・健康を中心とした学術研究用のリソースに特化して業務をすべきである。
- ・ 生物多様性条約への対応を着実に進めていると評価する。今後は名古屋議定書の批准をめぐって、実施の仕方(例、非商業目的への特別の考慮)について、具体的な考え方を求められる段階に入ろうとしている。学術サイドから、このような国際グループの中に入り、情報収集と意見交換をすべきと思われる。
- ・ 本年9月に札幌での国際微生物会議(IUMS2011)が開かれるので、様々な形で参画していただきたい。
- ・ 各機関での退職教員の保存株で損失が危惧される学術上重要な株の保存に注意を払っていただきたい。

3. 各室・チームのセンター内外における連携活動及び国際連携の促進について(特筆する活動・成果があればご記入お願いいたします)。

総評: 限られた人数で、国内外の連携活動によく努力され、センター内外における連携活動や国際連携も活発に行っている。

- ・ ANRRC の立ち上げと筑波開催、All species living tree project、The Microbial Earth project へ参画し、貢献していることについては高く評価する。日本独自の思想を深めて、世界での先導的な役割を醸し続けていただきたい(アジアの猛進に負けないように)。
- ・ 先進国の巨大機関、東南アジアの途上国との連携は別々の動きがある。現在は前者との連携が中心となり、それらと互角の活動を維持していることは、その陣容、規模を考えると高い評価を与えることができる。それらを低下されることのないようにしつつ、アジアでは何をすべきかをよく考えてネットワークを構築する必要がある。
- ・ JCM 株を利用した研究業績が多く報告されているが、海外での実績はどうか。可能であれば欧米、アジアなどに分類して、海外研究者の実績を示して欲しい。

4. その他コメントがございましたらご記入お願いいたします。

- ・ 完成度の高い、高質なリソース事業を展開しており、世界の微生物リソースの3大拠点の一つであることは、疑いのない事実である。これまでの体制のままで、効率化による対応は限界であることを客観的に示し、体制の充実を実現できるように検討して欲しい。
- ・ 精一杯の努力をしておられ、増加する寄託株に対応するための工夫が必要と思います(選択も必要かも知れませんor他機関の利用等)。
- ・ 現在重要とされる株以外に将来重要となる株(種)も検討するとよいと思われる。

- 世代交代が大きな問題として直面している。これに対し、今までの実績と規模を維持する体制と、新しいリソースの先駆的導入のための体制等は、現在の規模を拡大しない限り二者択一が必要であり、それを踏まえた時期と体制を考えなければならない。一般の研究室のように次の課題だけを考えるのではなく、理研 BRC 特有のリソースの将来と維持体制を考えて、早めに計画を立て適切な人材を確保して欲しい。

以上